

都会はぜいたくだ

小川未明

青空文庫

デパートの高い屋根の上に、赤い旗が、女や子供のお客を呼ぶように、ひらひらとなびいていました。おかねは、若い、美しい奥さまのお伴をしてまいりました。

そこには、なんでもないものはありません。みるもの、すべてが、珍しいものばかりでした。

東京へ出てきてから、奥さまにつれられて、方々を歩くたびに、田舎のさびしいところで働いて暮らす、お友だちのことを思わぬことはなかったのです。

「おつねさんなんか、こんなにぎやかなところは知らないのだ……。」と思うと、青々とした田圃の中に立っている、友だちの姿がありありと見られました。

千円、二千円という札のついた、ダイヤモンドの指輪が、装飾品の売り場にならべてありました。それを見ただけでもびつくりしたのです。また、食料品を売っている場所には、遠い西の国からも、南の国からも名物が集まっていました。そして、それにも高い値段がついていました。

「まあ、こんな高いものを、東京には、食べる人があるのだろうか？」と、疑われたのであります。

「おかねや、おまえの国の名物には、どんなものがあつて？」と、奥さまは、ふりかえつて、聞かれました。

「おかねは、なんだろう？」と思ひました。小学校にいる時分、地理の時間に、自分の国の名産をいろいろ教えられました、この東京にまで出されているような名物は知らなかつたのでした。

「わかりません。」と、耳を赤くしながら、答えるよりほかなかつたのです。

見て歩くうちに、相模川のあゆや、八郎瀧のふなまで、ならべられてありました。

「まあ、川魚までが、方々から、汽車で送られてくるのかしらん。」

このとき、彼女の頭に、弥吉じいさんの顔が浮かびました。じいさんは、川魚をとつて生活したのであります。どんな暗い雨の降る晩も出かけてゆきました。なんでも、青いかえるを針につけて、どろ深い川で、なまずを釣り、山から流れてくる早瀬では、あゆを釣るのだという話でした。

夏、秋、冬、ほとんどおじいさんの休む日はありませんでした。ちようど百姓が米を作ると同じように、また、職工が器具を作ると同じように、魚をとるのも、一通りでない骨おりであります。心ある人なら、だれでもこのようにして作られた、食物は

むだにし、また器具を粗末に取り扱うことをよくないと思うであります。

このおじいさんが、これほど、骨をおつて釣り上げた魚を、だれが、食べるのだろうか？ そう思つたことに、無理はなかつたのです。

なぜなら、雪の降る寒い晩に、おじいさんは、出かけてゆきました。村の子供らは、窓の外で鳴り叫ぶあらしの音に耳を澄まして、幾枚も蒲団をかぶつても、まだ震えがちにちぢこまつているのに、おじいさんは出かけなければなりませんでした。

川の上には雪が積もっていました。そして、その下の流れは、止まっていました。おじいさんは雪を掘り氷を破ると、その下に、黒い水がものすごく、じっと見上げています。

おじいさんは、カンテラの火で水の面を照らしました。これは、眠っている魚を呼び寄せ
るためであります。

もう長い間、穴の中に、または、深い水底に眠つて、春のくるのを待つていた魚たちは、ふいに明るくなつたので、びつくりしました。

「なんだろうな。」

「月でないかしらん？」

「雪が積もっているのに、月のさすはずがないじゃないか。」

「でも、明るく、なにか、水を照らしているようだ。」

「それにちがいない。おれたちは、もう長い間眠った。いつのまにか、雪が消えて春になったのでないだろうか。」

「そんなことはない。まだ、水が、こんなに冷たい。そして、どこにも春らしい気分はない。こんな変わったことのあるときは、要心が必要なのだ。」

「どれ、出かけて、みとどけてこよう。」

「それがいい。それがいい。」

魚たちは、半分おそれながら、ちらちら動く、カンテラの火の方に近づいたのです。火は赤い花が、風に吹かれて、地面をはいながら頭を振るように、暗い水の面にゆれていました。

「もう、だいぶ、魚の寄った時分だな。」

おじいさんは、手網で、ふいにすくうこともあれば、また糸を垂れて釣ることもありま

した。
おかねばかりでない。村の子供たちも、大人も、人のいい弥吉じいさんが、魚をとる苦心を知らないものはありませんでした。それですから、おじいさんのとった魚は、いくら

うまくても、村むらのものは、もつたいなくて食たべられない気きがしました。

おじいさんは、とつた魚さかなは、ふなでも、なまずでも、またあゆでも、みんな町まちへ持もつていつて売うつたのであります。

「おじいさん、命いのちがけでとつた寒かんぶなだ。いい値ねに売うれるだろう。」と、人ひとが聞ききますと、
「なんの、おかゆがすすられるだけのものです。」と答こたえて、頭あたまを振ふりました。

「だれが、おじいさんのとつた、魚さかなを食たべるだろうか。」と、おじいさんに聞ききますと、

「さあ、だれが食たべるものか、そればかりは、わしにもわからない。」と、おじいさんは、答こたえたのでした。

お金かねがいくら高たかくても、うまいものを買かう人ひとのたくさんいる東とうきょう京へ、あのおじいさんのとつたなまずや、寒かんぶなは、この遠とおい北きたの八郎ろうがた瀉おくから送おくられてきたふなのように、送おくられたのではないだろうかと、おかねは考かんがえました。

「奥おくさま、どうして、東とうきょう京の人ひとは、高たかいお金かねを出だして、めずらしい、うまいものを食たべるんでしょうか。」と、おかねは、ききました。

「おまえ、それは、都みやこと田舎いなかとは、いつしよにならないよ。東とうきょう京の人ひとは、口くちがおごつているから。しかし、このごろは、田舎いなかも、だんだん東とうきょう京と同おなじになつてきたという

話だよ。」と、奥さまは、おっしゃいました。

しかし、おかねは、自分の生まれた村は、昔とかわらないと思っていました。

「奥さま、そんなことをすると、私どもには、罰があたります。」と答えた。

「ほほほ。」と、奥さまは、笑われました。

いろいろ外国からきた、びんにはいったよい酒のならばとあるところへきて、奥さまは、青い色の酒をお買いになりました。

「奥さま、お酒をめしあがるのでございますか？」と、おかねは、ききました。

「これは、甘いお酒なのよ。」

ほんとうに、家へ帰ると、かわいらしいグラスのコップについて、奥さまは、青いお酒をめしあがりました。

「おかね、おまえも一杯飲んでごらん。」といわれたので、おかねは、びっくりして、

「私は、まだ、お酒を口にいられたことがありません。」と、辞退しました。

「いいえ、このお酒は、けつして、毒にはならないの。そして、それを飲むと、なにかしらん、昔のことを思い出しますから……。」と、奥さまは、おっしゃいました。

「奥さま、昔のことといえますと……。」と、おかねは、なんとなく、なつかしいような

不思議な気がしたのです。

「そうなの、忘れてしまったことを思い出すのだよ。」

おかねは、そういわれると、飲^のんでみたくなりました。

「すこしばかり、いただきます。」といいました。

青^{あお}い夕^{ゆう}空^{ぞら}のように、淡^{あわ}いかなしみをたたえたお酒^{さけ}が、小^{ちい}さなコップにつがれました。

おかねは、それに、くちびるをつけると、甘^{あま}くて酒^{さけ}という感^{かん}じはしませんでした。これなら、もつと飲^のめるように思^{おも}いましたが、やはりそれは、酒^{さけ}でありました。いつしか、いい心地^{こころ}となったのであります。

しばらくすると、胸^{むね}の中^{なか}が熱^{あつ}くなりました。そして、おかねは、飲^のむのでなかつたと思^{おも}いました。

「忘^{わす}れてしまった、昔^{むかし}のことつて、いつ、思^{おも}い出^だすのだろうか？ 奥^{おく}さまは、私^{わたし}をおだましになつたのかもしれない。」と思^{おも}つて、床^{とこ}につきました。

* * * * *

弥^や吉^{きち}じいさんの孫^{まご}に、新^{しん}吉^{きち}という少^{しょう}年^{ねん}がりました。おかねとは仲^{なか}よしでありました。新^{しん}吉^{きち}には両^{りょう}親^{しん}がなく、おじいさんに育^{そだ}てられたのであります。

ある日、二人は、草原の上で遊んでいました。すると、新吉は、ぼんやりと立って、あちらの高い山の方を見ていましたが、急に、しくしくと泣き出しました。おかねは、驚いて、

「どうしたの？ 新ちゃん。なぜ、泣くの……。」と、たずねました。

新吉は、だまって、両手で自分の目をこすって、涙をふきました。

「どうしたの？ 新ちゃん。」と、おかねは、かさねて、たずねました。けれど、新吉は、さびしそうな顔つきをして、だまっていました。そして、いまのことは、すぐに忘れてしまつて、二人はそれから、おもしろそうに遊んだのであります。

新吉は、九つするとき、ほんの一夜、病氣になつて臥たばかりで死んでしまいました。弥吉じいさんの、歎きは一通りでありません。その後、おじいさんは、さびしい、頼りない生活を送らなければなりません。おじいさんは、孫の新吉と仲よしであつた、おかねをいつまでもかわいがつてくれました。

いつのまにか、おかねは、床の中で、忘れていた昔のことを思い出していました。すると、急に、昔がなつかしく、ふるさとが恋しくなつて、床の中ですすり泣きをしました。そのうちに、眠入つてしまつたのです。

眠りがさめると、いいお天気でありました。おかねは、もう昨日のことは忘れて、せつせと働きました。夏の日は、はやくから庭さきに当たって、まつばぼたんの花が、黄・紅・白、いろいろに美しく燃えるように咲いていました。

「まあ、きれいだこと。」と、見とれていると、小ばちが、羽を鳴らして、花の上を飛んでいます。そこへ、奥さまは、お見えになつて、笑いながら、

「おかねは、昨夜、なにか、夢を見たね？」と、おっしゃいました。

おかねは、頭をかしげましたが、思い出すことができせん。しかたなく、下を向いて笑っていました。

「怖ろしい夢でも見たのか、大きな声を出してよ。」と、奥さまはいわれました。

おかねは、久しぶりに、子供の時分のことを床にはいつてから思い出したことだけはわかりました。けれど、そのほかのことは、わかりませんでした。彼女は、また、はればれとした顔をして、おもしろそうに、仕事をつづけました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 7」講談社

1977（昭和52）年5月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「未明童話集 5」丸善

1931（昭和6）年7月10日発行

初出：「教育研究」

1930（昭和5）年8月3日

※表題は底本では、「都会《とかい》はぜいたくだ」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：館野浩美

2019年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

都会はぜいたくだ

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>